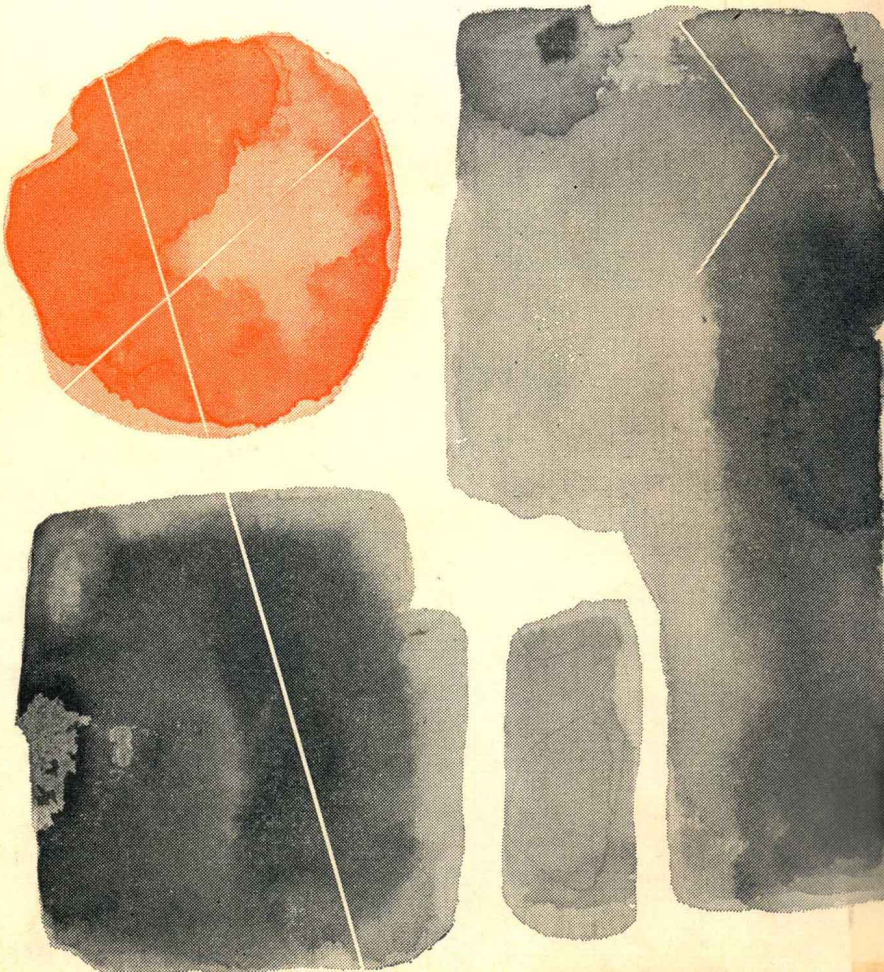
現代語法序説

シンタクスの試み

三上　章



MIKAMI Akira

現代語法序説

シンタクスの試み

くろしお出版

1972, Tôkyô

現代語法序説

1972年4月20日　復刊第1刷発行
1973年6月20日　第2刷発行
1977年3月20日　第3刷発行
1980年3月1日　第4刷発行

Kakite:　三上(ミカミ)　章(アキラ)
Hanmoto:　くろしお出版

〒101　東京都　千代田区　神田小川町　3-24
でんわ (03)291-3557　ふりかえ 東京 9-31301

ページおちの本，ページみだれの本は　とりかえます。

序

佐久間　鼎

ミカミさんの研究の成果がまとめられて、整った姿でこゝに公刊される運びになったことは、よろこびに堪えないところです。

これまでに公表されたところは、ごくわずかな部分に過ぎませんでしたが、具眼の専門学者たちの間では、その異色ある主張と理にかなった論旨とは、早くから注目されていたと思います。それはいずれも枝葉末節にわたるような、ありふれた論議ではなくて、いつも根本問題の大綱をとらえてその核心にふれるような究明なのでした。

著者が一年前にまとめたという旧稿を、わたくしはいま通読する機会にめぐまれました。ここでは、著者の意図した現代語のシンタクスに関する主要問題が、かず〳〵取り上げられて、周到な考察の対象となっています。著者の着想は、しば〳〵人の意表の外にぬけ出して一見奇想ともいわれる境地にふみこみますが、一面観にとらわれて行きすぎにおちいるということは

なく、片手おちの見解ですべてを割り切ろうとする無理おしをせずに、いろ〳〵の角度からの見方によっての反省を加えて、中正の道を見出そうとつとめています。当面の課題に立ちむかうのに当って、その正面からだけでなく、その側面からもまたその裏面からも、いわばためつすがめつ、とみこうみして、ついにその内面にまでたち入って見きわめようとします。それには大きな骨おりと多くの苦しみがいるわけですが、そうした困苦をふみこえて到達した境地、ひらきえた展望は、新鮮でさわやかな景観を呈したのです。それは従来のものよりもずっと高く引き上げられた水準における語法認識のかがやかしい所得なのでした。

事がらの理解に当って、一刀両断に断ちきれ、わりきれるような論理的明快さを求めたがるのは、人情の自然でしょう。それは、客観的事象の研究に従事する人たちにとっても根づよい誘惑となるもので、それにまかせて押し切ろうとすると、とかく事がらのさながらの面目をゆがめてかえりみないような任意性をゆるすことにもなり、ありのまゝの事理をすなおに受け入れるのを妨げるようにもなります。たとえば定型による分類などに、こうした誘惑からの手ごころが加わると、個別的事実をむりにでも一たん立てたワクの中へはめこんで、割り切ったつもりになりがちです。実際には、型と型との中間に位し、型から型への推移に際してあらわれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

る移行型の存立を容認しなくてはならないばあいが少くありません。「準詞」というものを立てることによって、「詞」と「辞」との両断的論法の明快さをすてゝ、むしろこくめいに事実を受け入れる立場を保つというような行き方は、事理の鮮明にとってまさにとるべき態度というべきものです。

ここに提出された諸問題に対する著者ミカミさんの解答を批判しかつ評価することは、わたくしのいまの任務ではありません。この旧稿によってうかがわれる著者の、随所に創見でみたされている業績を、わたくしは実に内心のおどろきをもって読みとりました。その後さらに数層の進展を遂げたと自負されている研究の成果を、このたび公表される新稿によって知ることができることは、まさしくもどかしさにみちて待望するところです。十年の刻苦の成果を世におくるための心身の過労で、いま病の床に横わると聞く著者のために、十分の健康をとりもどして今後ともいよ〳〵この道に精進されるよう、心から祈ってやみません。

現代語法序説　目次

佐久間鼎先生序文
九　品　詞　表
各章レシュメ……一
第一章　私の品詞分け……五
一、分類の目的……五
二、ハシモト単位……一〇
三、トキエダ辞……一七
四、準用ということ……二四
五、記号の境遇性……三三
六、動詞文と名詞文……四〇
七、副　詞……五〇
八、辞書に対する注文……六一

第二章　主格、主題、主語……七三
一、用語の区別……七三
二、英文法の主語……八二
三、格助詞と係助詞……八八
四、動詞の受身……九八
五、敬語法のA線……一二
六、提示の二種類……一三
七、一致認定……一三
八、部分主格……一三八
九、中等文法批判……一四
第三章　活用形の機能……一五
一、活用の概念……一五
二、活用のカテゴリイ……一六二
三、係りと結び……一七

目　次

四、陳　述　度……一八一
五、用言の形式化……一九四
六、「何　々　ハ」……二〇〇
七、アスペクトの問題……二〇九
八、テンスの問題……二一九
九、「ノデアル」……二三二
第四章　単式と複式……二四九
一、格と格助詞……二四九
二、不定法部分……二六五
三、連体と連用……二七四
四、接続助詞……二九一
五、副詞の種類……三〇三
六、発言のムウド……三一八
七、間接引用……三三〇

八、引用に関する準詞……三四〇
九、句読法の悩み……三五五
後　記……三六五
索　引……三七四
フロク　処女試論「語法研究への一提試」……三七五

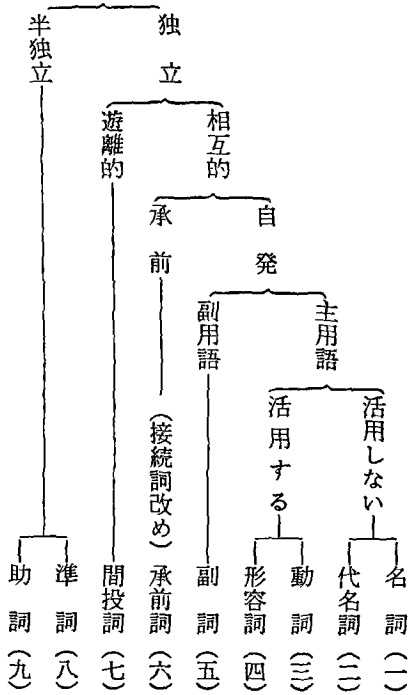
本文は平仮名で新仮名使い
例文は片仮名で、概して旧仮名使い

既成文典中しばしば引用するものを次の如く何々文法と略称する。

大槻文法——広日本文典　一八九七年
山田文法——日本文法講義　一九二二年
　日本口語法講義　一九二二年
松下文法——標準日本口語法　一九三〇年
佐久間文法——現代日本語の表現と語法　一九三六年
　現代日本語法の研究　一九四〇年
　日本語の言語理論的研究　一九四三年
橋本文法——橋本進吉著作集、第二巻
　新文典、別記口語篇
時枝文法——日本文法、口語篇　一九五〇年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

九品詞表



(四) 形容動詞はもはや形容詞である。

(五) 連体詞と数詞とを副詞の中に入れる。たゞし数詞は転じて名詞にもなる。

(八) 準詞というのは橋本文法の準用辞を承けたもので、助動詞、副助詞、準体助詞、それから佐久間文法の吸着語などを一括した品詞。

各章　レジュメ

第一章　私の品詞分け

品詞を part of speech という。その part に当るものは文節であって単語ではない。我が単語の文法的役割はいくぶん消極的なものである。だから品詞分類ではあまり理論にこだわらず、慣用を重んじる立場を取った。ただ付属辞を活用の有無によって助動詞と助詞とに分けるのを改めて、付属程度の一次二次によることにした。

動詞では「行キ、行ク、行ケ、行ケバ、行カウ」の活用語尾を一次的接辞と見なし、名詞では「私ノ、私ガ、私ヲ、私ニ」などの格助詞の如きを一次的接辞とする。そして

行キ|マス

行ク|ノナラ……

私ニ|ダケ言ツテクレ

私ダケ|ニ言ツテクレ

の傍線のような単語を二次的接辞として、一括して「準詞」と名づけた。

第二章　主格、主題、主語

日本文には主語と名づけるべき成分は決してあらわれない。だから「主語」は日本文法に関する限り全く無益な用語である。無益であるのみならず、正当な問題から注意をそらせる傾向がある点で、有害な用語である。主語という用語が一日も早く廃止されるよう望んでやまない。

その代り、主格に地位の高いのや低いのがあることを認めて、能動主格（意義上やゝ西洋の主語に匹敵）、所動主格、部分主格の三種類の区別を設けた。

第三章　活用形の機能

活用形の語形を重んじ、各活用形の文法的機能をいろんな方向から調べてみた。活用形こそシンタクスの基礎になるものだからである。たゞし、そもそも活用とは何か、という反省にはあまり立入っていない。

第四章　単式と複式

活用形同士の係り結びの様式を見出そうとつとめた。部分的にあれこれ気づいた語法を書散らしたが、それらを整理して一つのシステムにまとめ上げることは将来の課題である。重要にして困難な課題である。終節「句読法の悩み」とはシンタクスの悩みの集約的表現にほかならない。

第一章　私の品詞分け

一、分類の目的

我々は何のために品詞分けをするか。品詞分けの必要はどこにあるか。実際的な目標は簡単である。語学の研究に役立つように、である。

広義の文法研究を、私は次の三部分から成立つものと考える。

甲、品詞論（フクシデンス）＜乙、辞書編集（レキシコグラフィ）
　　丙、シンタクス

普通に甲と丙とを合せて文法と称するが、文法の中で大切なのは丙のシンタクス（連結法、統辞法、文章論、構文論）であって、甲の品詞論はその準備をする段階にすぎない。甲は文法初歩であるとともに、また乙の辞書編集の手引をなすものであって、品詞論の要約は辞書の巻頭に緒論として掲げるべきものである。たゞし先進諸国においては、品詞論のあらましが国語教

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.